

学校だより

恵那市立岩邑中学校

温故知新

学校の教育目標

確かな学力 豊かな心 逞しい体

令和5年6月27日

『修学旅行は必要か』～胸の中のモヤモヤ～

校長 片桐宣伸

本校は、1年間を5つの期にわけ、期ごとに目標を設定し教育活動を行っています。Ⅰ期は目標を『土台づくり』とし、主に学級組織や学校生活の基盤づくりに取り組んでいます。そして、『土台づくり』を行う原動力（主体性を生むエネルギー）として、すべての学年で宿泊研修を実施しています。

3年生の生徒に『修学旅行は必要か』と、校長として胸の中にあるモヤモヤを、思い切って投げかけてみました。「あるのが普通だ」と考えている子どもたちに、この質問の真意が伝わったかは分かりません。

よく「学校の常識は、社会の非常識」という批判を耳にし、そこには思い当たる節もあります。ところが、最近では「学校の常識は、社会の非常識」に縛られる教職員の苦悩に、共感的な言葉も聞かれるようになりました。先日、インターネットで【修学旅行の引率で8万円を自腹】【24時間勤務が3日間続く】※という記事が話題になっているのを見かけました。同様に、「学校の常識は、社会の非常識」に縛られ苦悩しているご家庭や生徒はいないのだろうか？

例えば、3回の宿泊研修にかかる費用は、家計の負担にはなっていないだろうか。様々な理由で、複数人で1つの部屋に宿泊することが苦しい生徒もいるのではないか。災害や事件・事故など、命を落とすような危険は無いと言えるだろうか。※インターネットで見られる【修学旅行の引率で8万円を自腹】【24時間勤務が3日間続く】という表現は言葉足らずで、事実とは異なります。

もし、観光旅行のように希望者のみが参加するような研修になったら、ましてやスカイダイビングを行う前のように「危険があることを十分に理解し」というような同意書まで取って実施しなければならない研修になったのなら、教育的価値があると言えるだろうか。教育的価値があるからといって、大きなリスクを抱えたまま実施してもよいものだろうか。…東京研修の帰途につくバスの中、東京・千葉で大きな地震が発生したというニュースに、不謹慎ながら「昨日でなくてよかった」と胸をなでおろす自分がいたことを、はっきりと覚えています。

『修学旅行は必要か』『同じお金を使うのなら、家族や好きな子と一緒に自由な旅行に行けばいいのではないか』という問いに、3年生の生徒の1人がこう答えました。「修学旅行でしかいっしょに行けない子や、修学旅行だから行ける場所があるので、必要です」と。生徒がそこに価値を見出せるのなら、私たち職員は、その思いに応えたいと思いました。

研修を終えた生徒たちは、集団として「一皮むけた」感じがあります。Ⅰ期『土台づくり』の達成です。学校は、Ⅱ期『絆づくり』に入ります。